〔好色一代男三〕是非もらひ著物

鼈甲の差櫛が本蒔繪にて、三匁五分で出來るなどと、はしたなく申せしは、聞いて戀も覺ぬべし、

〔我衣〕明暦年中迄ハ大名ノ奥方ナラデハ鼈甲ハ不用、〇略中元祿ノ比ヨリ世上活達ニナリテ、鼈甲モハヤアキテ、蒔繪ナドカヽセ、鼈甲モ上品ヲエラビ、價ノ高下ニカヽハルトイヘドモ、金二兩ヲ極品トス、享保頃ヨリ鼈甲ノ上品五兩七兩トナル、依之常體ノ女求ルニ不及力、木ノ櫛ニ色々ノ蒔繪切金等ヲカヽセ、百疋、二百疋ニテ求ム、ソレユヘ寛保年中ヨリ、細工人ニ上手出來テ、水牛ノ色ヨキニ鼈甲ノ黑斑ヲ入テ、上鼈甲ノマガヒニ賣、是モ始ハ廿目ホドモ致シケル、櫛算トモニ上手ニ似セタリ、

〔物類稱呼四器用〕櫛くし　京大坂にて、たいまいのくしといふを、江戸にてべつかうのくしと云、

〔倭訓栞前編爾二十〕にたり、〇略中櫛にいふは、牛角を和らげて、玳瑁に似せたるもの也、

〔歷世女裝考二〕瑇瑁の櫛俗にいふべつかふ

賢女心の鏡〇書名、中略、われは此年まで、髮の中に小枕の外は、蒔繪の木櫛に、黑き算をくぢらなさして花をやりしに、娶のあたまをみれば、透玳瑁の櫛をさし、算の外にかんざしとやらいふ物、何の用に立事ぞ、

〔空穗物語樓の上之下〕大にのぼり、さて殿に去ろがねのすきばこ、甘がう、あやちうのみねに、らてんすりたるくしなど奉りたるないしのかみ、宮の御方にな、つ、我御方にもの御方々々にも二三づゝくばり奉らせ給、

〔類聚雜要抄四〕甲筥懸子、納螺鈿櫛四十枚、

〔新編鎌倉志一〕鶴岡八幡宮　神寶

十二手匣　壹合小道具不備、箱ノ内ニ圖〇略圖ノ如ナル櫛三十アリ、櫛ノ徑三寸八分餘、高サ一寸